

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
 大学院生研究
 2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション 研究科 異文化コミュニケーション 専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 4年	瀬端 睦 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 教授	小山 亘 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ (社会)	個人・共同の別	(個人) ・ 共同 名
研究課題名	「気遣い」の言語人類学：食事場面におけるジェンダー・イデオロギー分析		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 4年	瀬端 睦	
研究期間	2011 年度		
研究経費	200 千円		

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

現代において、気遣いは、愛情に基づく配慮の意味で用いられている。気遣いができるべき存在として女性、母親を位置づける言説も散見され、気遣いと女性、母親は頻繁に結び付けられる。よって、本研究では、現代において、女性や母親と結び付けられやすい「食事」の場面における気遣いに関する実際の会話を記録すると共に、参加者へのインタビューを行い、それらのデータの談話分析を行うこととする。人々が気遣いに関して、どのように認識し、語り、実践しているのか、に焦点をあて、ジェンダーの実践と気遣いの関係を紐解く。そうすることで、気遣いに関わるミクロな相互行為におけるジェンダー・イデオロギーを明らかにすることを目的とする。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[気遣い] [ジェンダー] [イデオロギー]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1) はじめに

本研究は、食事場面というミクロな相互行為に着目し、ジェンダーの実践と気遣いとの関連を明らかにすることを目的としたものである。現代において、気遣いは、人として社会に認められること、特に、女性として認められることに深く関わっていると考えられるからである(瀬端, 2011)。

2) 食事談話の事例研究

本報告書では、主に、ある1つの食事場面の事例をもとに、研究の成果を論じていくこととする。女性1人(以下、F)と男性1人(以下、M)、そして、女性調査者1人(以下、R)、計3人が参加した食事会で、FとMは高校の同級生、FとRは大学院の同級生、MとRは初対面である。以下のトランスクリプトは、追加注文したトマトペーコン巻が運ばれてきた直後の場面のものである。

M1: あーおなかいっぱいだ

R2: あたしこれ(トマトペーコン巻)なんかもう

F3: うん

M4: 脂っこいでしょ? ちよつと [きついよ]ね、ちよつときついよ]ね。うん

R5: [ごちそうさまって感じ

R6: いる?

F7: あーそう、じゃあ、もらうわ

M, F8: (笑)

M9: Fちゃん

F10: なに?

M11: ねえ。ね。ね。あのねえ飯にもさ、飯にもここに[異性]というものがいるんだからさ

F12: (笑)

R13: いーじゃん

M14: 同同性なんか同性同士のさ (笑)

F15: え、なに? なに?

R16: よく食べるのはいいことですよ

F17: なん、食べるのがいけないの?

M18: いやいいんだけどさ。いいんだけどやっぱり、ほら、普通女の子って男の子の前ではさー、ちよつとおしとやかになつたりみたいいな。あごめんFに聞いたのが間違いだっただ(中略)

F19: 分かった。じゃあこれはさあ、じゃ話して。Mは今までどんな女性に会ってきたの? 言ってごらん。例えば? じゃあご飯で、食べる時 [はい、言ってごらん

R20: [これ一個しかないよ

M21: F、Fみたいな人とは正反対の(中略)「おなかいっぱいだよね」つったら「うん」って

何が言われているのか(言及指示的意味)に関しては、理解できることを前提として、何が為されているのか(行為の意味)の分析を試みる。まず、このやりとりのコンテクストとして、MはRが気遣いの研究を行っていることを了解している。やりとりを具体的に見ていくと、M18の発話では、女性は男性よりも食べないようにするのが普通であるというステレオタイプが表明されている。そのステレオタイプに基づくMは、M1の「おなかいっぱいだ」という発話に沿ったR2の発話を受けて、連帯感を生み出す終助詞「ね」を使用することで、「女性=あまり食べない=R」という等式をMとRが共有していることを指し示し、Rを女性として承認する行為を行っていると考えられる。それを食事会全体へと広げれば、MはRを気遣いのエキスパートとして見なし、それを女性は気遣いができるものだというステレオタイプと結びつけることで、「R=気遣いができる=女性」という等式を成立させ、Rを女性として承認する行為に従事しているということになる。一方で、Mは、FがRの分の食べ物をもらってまでよく食べることを指摘することで、また、「これまでどんな女性に会ってきたの?」という質問に対し、「Fみたいな人とは正反対の」と述べることで、Fを女性としては承認しない行為を行っている。

まとめれば、食事場面のやりとりにおいて、MはRを女性として承認する一方で、Fを女性として承認しないという行為に従事しているということである。人々が日常どのようにして「男」と「女」の区別を行っているかという問題は、例えば、エレベータに乗ってきた人を見かけから男か女か判断するというレベルももちろんあるが、より重要なのは、人格的に女や男として、ゲイやレズビアンとして、あるいは、その他の人として、社会に認められるかど

研究成果の概要 つづき

うかという問題である。現在、「男であること」と「女であること」どのように捉えられ、実践されているのか。これらの問題に関して、これまでのジェンダー論の議論を参照しつつ、以下で詳しく論じる。

3) 「女であること」と「男であること」

上野 (2010) によれば、女の値打ちは男に選ばれることによって決まる (と考えられている) が、男の値打ちは女に選ばれることによって決まらず、男同士の世界の覇権ゲームによって決まる。「女を (最低 1 人は) モノにする」ことで、男同士の間で一人前の男として認められること、そのことが男である最低条件となる。言い換えれば、その人が「男であるかどうか」は他の男性が判断するが、その人が「女であるかどうか」は男性が判断するという非対称性が見られるということである。

以上の議論では、男性が男性をどのように「男として」承認するかの議論に焦点があたっており、男性が女性をどのように「女として」承認するか、あるいは女性が女性をどのように承認するかの議論は、あまり為されていないと考えられるので、ここで考察を試みる (食事会の登場人物である男性と女性というジェンダーに絞って考察する)。上記の食事会のやりとり以外の箇所も参照した上で、推察されるのは、M や F にとって、「恋愛対象になるかどうか」が、イコール「女であるかどうか」の判断基準になっているのではないかとということである。男性にとって、自分が女性の「恋愛対象であるかどうか」は、「男であるかどうか」とイコールにはならない。上述の通り、女性に肯定されなくても、男性 (社会) に肯定されることによって、男は男たり得るからである。一方、女性にとって、男性から恋愛対象にされないということは、「女ではない」と言われるのとイコールである。女性は他の女性から「女である」や「女でない」といった承認や否定が与えられることはない (「男の中の男」という表現はあっても、「女の中の女」という表現は不自然である)。女性同士の中での評価は「女であること」以外の基準でなされることが多い。男性から恋愛対象とされる女性が、女性同士の間では、つまはじきにされることもある。男性の覇権ゲームの世界は、男性のみで完結しているが、女性の間での評価基準は、男性が設けた「娼婦」と「聖女」という区分に浸食され、様々に分断されている。以上のような形で、女性が「女として」承認されるのは、男性によってのみであるので、例えば、結婚した女性は、もはや恋愛対象ではなくなった自分が女であるのかどうか悩まされ、セックスレスの夫婦の女性も、自分が女であるのかどうか不安になる。一方で、結婚した男性がそのような問題に悩まされることはない。結婚した男性は、そのことにより、男性社会で一人前と認められる。夫婦の問題に男性が悩むとすれば、自分の欲望を女性に押し付けられないなどの「優越、所有、権力 (男らしさ)」(伊藤, 1996) の問題で、男性社会から認められないことによるものだろう。女性にとっては、男性との関係自体が、自分が「女であること」に寄与するのに対して、男性にとっては、女性と関係を持つことによる、周囲の男性による評価の方が、自分が「男であること」に圧倒的な重要性を持つと考えられる。(婚姻外の女性と関係を持ち、自分が男であることを証明する男性もいるが、それは概して、男性社会からの承認を得るためのものである。一方、女性が婚姻外の男性と関係を持つ場合は、自分が男性の恋愛対象になること (女であること) を確認するためであることが多い。)

上記の食事場面で、M が R と F を女性 (= 気遣いができる、男性以上に食べない) と女性でないものに区分けする行為に従事していることは確認したが、その一方、M11 の発話では、F に対して M 自身のことを「異性として」指し示している。自分のことは F に「男として」示しながらも、F のことは「女として」認めないという行為を行っていることになる。これは「男であること」と「女であること」の承認に関する非対称性をまさに示しているのではないだろうか。そして、母というママ、妻というママ、バーのママの三者に甘えるとされる男性の精神的他者依存性にも関連していると考えられる。

4) まとめ

以上では、食事の場面というミクロな相互行為に焦点をあて、日常でどのようにジェンダーが実践されているのかに関して、気遣いと関係付けながら、分析・考察した。気遣いは「女として」承認されることに深く関わっていることが示された。そして、「女として」「男として」の承認の非対称性は明らかとなったが、そのこととジェンダー・アイデンティティ (性自認) やロマンティックラブ・イデオロギーとの関係については十分に検討できなかったため、今後の課題としたい。

(引用文献) 伊藤公雄 (1996). 『男性学入門』作品社.

瀬端睦 (2011). 『「気遣い」と敬語の系譜』『異文化コミュニケーション論集』第 9 号, 115-127.

上野千鶴子 (2010). 『女ざらい』紀伊国屋書店.

※ この (様式 2) に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書 (A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式) を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ① 瀬端睦 (2011). 「自己の語りの再帰性と遂行性：インタビュー事例のメタ語用論的分析」『社会言語科学会第28回大会発表論文集』 pp. 202-205.
Sebata, Mutsumi (2012). “The interview as a Research Method”
『異文化コミュニケーション研究』第24号 (in press)
- ② 瀬端睦 (2012). 「気」(石井敏・久米昭元・浅井亜紀子・伊藤明美・久保田真弓・清ルミ・古家聡・編)『異文化コミュニケーション事典』春風社 (予定)
- ④ ・学会発表
瀬端睦 (2011). 「東アジアにおける気の展開：近現代日本における『気遣い』に関する談話分析を中心に」第二回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム (8月23日, 於: 延辺大学, 中華人民共和国)
瀬端睦 (2011). 「自己の語りの再帰性と遂行性：インタビュー事例のメタ語用論的分析」社会言語科学会・第28回大会 (9月17日, 於: 龍谷大学)
- ・報告書など
瀬端睦 (2012). 「日本における韓国大衆文化と在日 (イ・ヒャンジン氏)」『多文化関係学会ニュースレター』第20号, pp. 12-13.
瀬端睦 (2012). 「John W. Du Bois: Discourse and Grammar」永井那和・辻田麻里 (編)『*The New Psychology of Language*を読む』「言語と人間」研究会. pp. 6-7.